

青年海外協力隊と キャパシティ・ディベロップメント

細野昭雄
(JICA研究所)

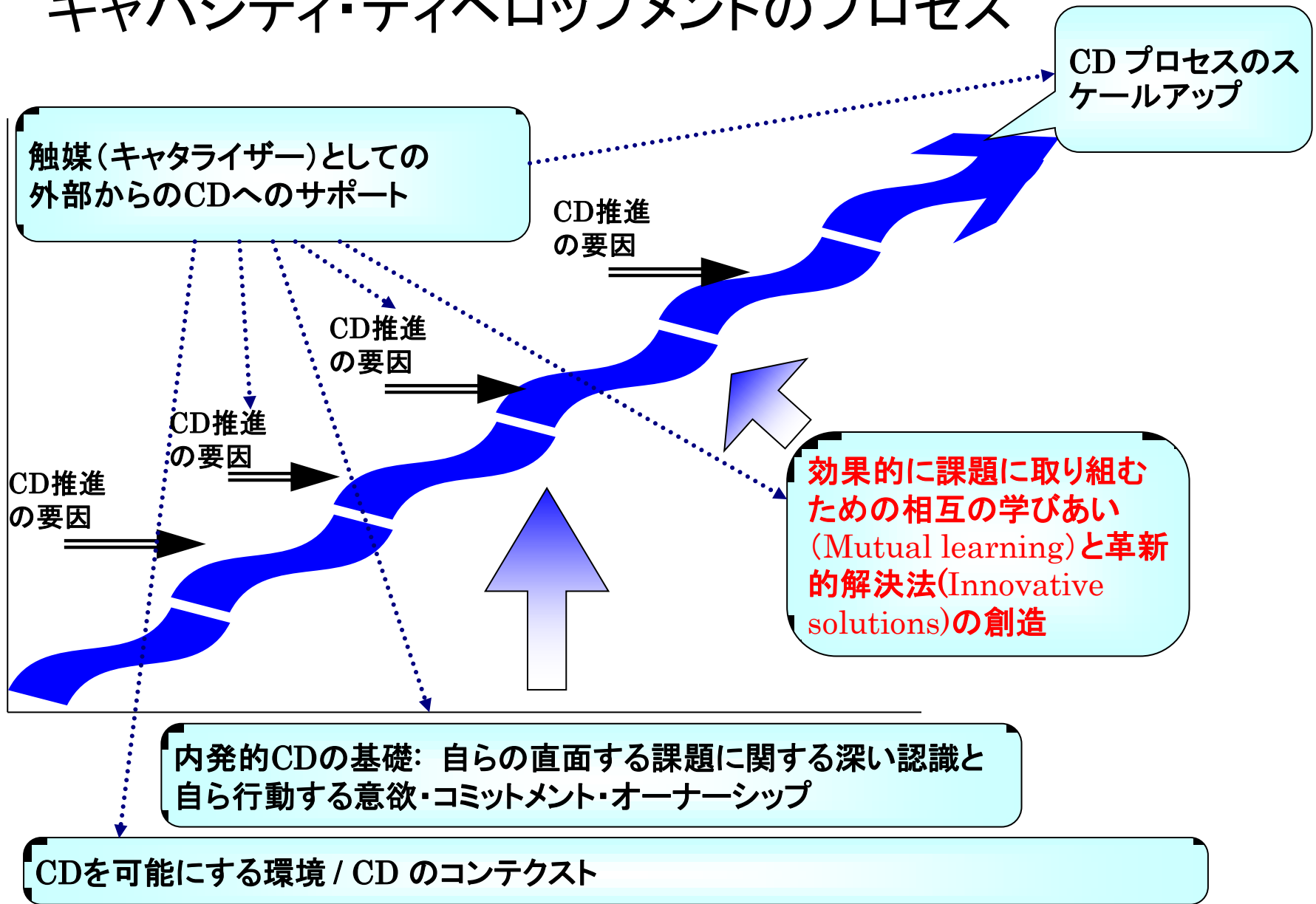
1. キャパシティ・ディベロップメントを目指す協力

- 技術協力の目的は、**開発課題に対する途上国の自律的な課題対処能力(キャパシティ)を、構築・強化し持続させるため**にあるという考え方は、**キャパシティ・ディベロップメント** (Capacity Development. 以下CD) を目指す協力として知られている

キャパシティ・ディベロップメント(CD)とは

- 途上国の課題対処能力が、個人、組織、社会などの複数のレベルの総体として向上していくプロセスとして一般に定義される。（OECD/DAC 2006、国連等も同様の定義）
- その最大の特徴の一つは、CDの内発性の重視。
- **キャパシティを外から構築するという意味での介入を行うのが技術協力であるとの視点に対し、CDの視点では、キャパシティは途上国自身による内発的なプロセスであり、技術協力はそのプロセスに対して触媒的な役割を果たすことを目指すものとする**

キャパシティ・ディベロップメントのプロセス



「日本の開発協力の良き伝統」


- 「相手国の自主性、意志および固有性を尊重しつつ、現場主義にのっとり、対話と協働により相手国に合ったものを共に創り上げていく精神、さらには共に学び合い、開発途上国と日本が相互に成長し発展する双方向の関係を築いていく姿勢」
- (『開発協力大綱』2015年)

協力隊のCDへの貢献

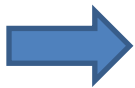
- 協力隊は、日本の協力的一端を担っただけでなく、その特徴を発揮するうえで、極めて重要な役割を果たしてきた。協力隊員は、途上国の人々と生活し、直面する問題に取り組む人々に寄り添い、問題解決の新たな方法の創造に寄与してきた。地元の人々と日々生活を共にし、そのコミュニティや地方自治体などを拠点として活動する協力隊員は、CDの触媒となりうる条件をもっともそなえている。

2. 中米・ドミニカ共和国算数プロジェクト

- 課題の認識: 主体的な課題の認識、課題に取り組むために行動する意欲、コミットメント、オーナーシップ
- 協力隊の活動からスタート: 小学校の現場に派遣された教員の経験を有する協力隊員が、ホンジュラスの教員と協働する中で、算数教育改善の必要性を痛感するに至るとともに、**ホンジュラスの教員が、日本の教員との交流を通じて、自らが直面する課題をはっきりと認識するという、「相互学習と解決をめざす新たな取り組み」を現場で進めていくプロセスがあった** ➡ 教員の課題の認識

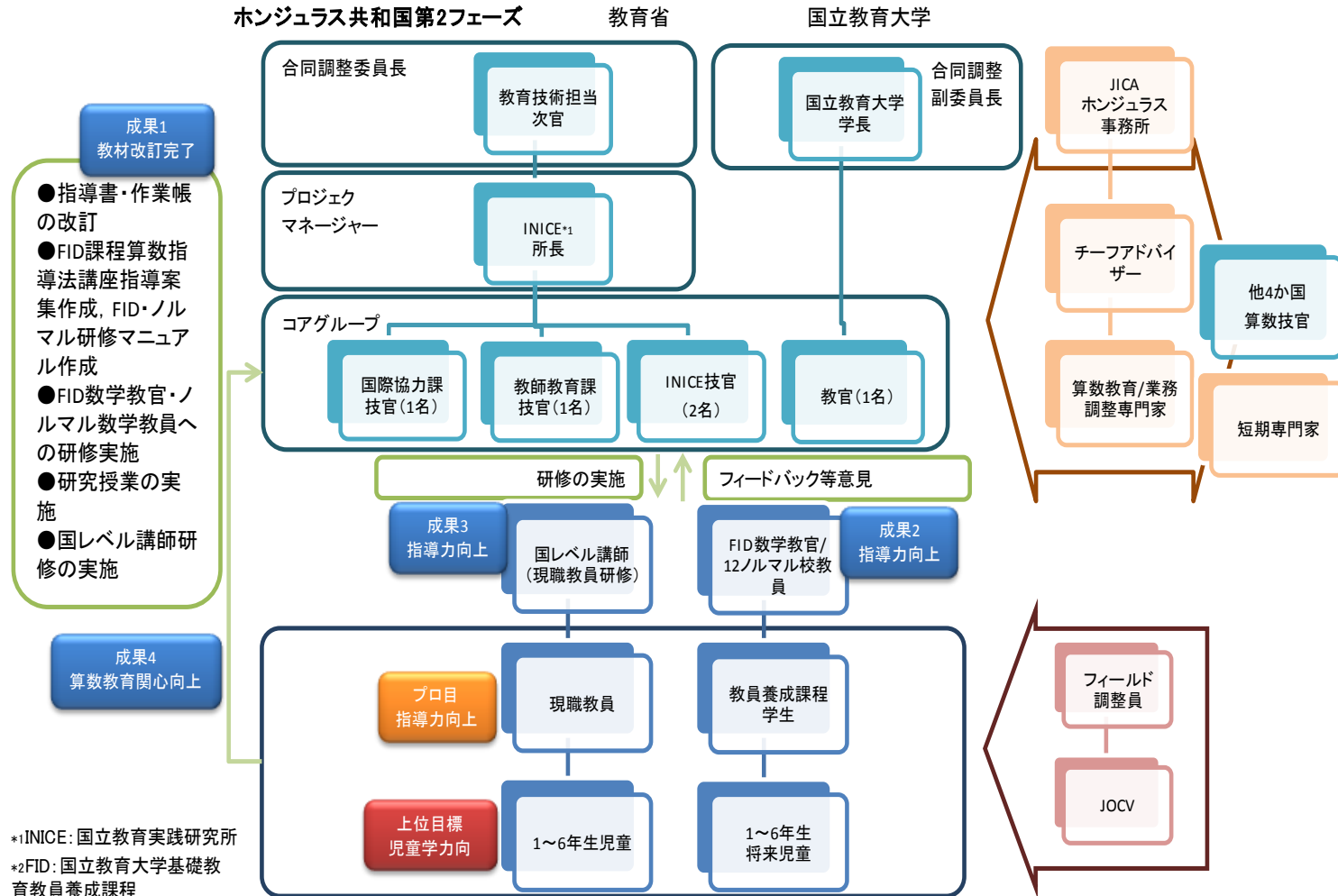
- 1998年に同国が初めて参加した中米・カリブ地域の国際学力比較調査で、算数の成績が参加11カ国中最下位だったことが、ホンジュラスの教育関係者に大きなショックを与えたという背景もあった。これが、ホンジュラス政府が算数教育に関する協力を日本に要請する直接のきっかけとなった  政府(教育省等)の課題の認識

- 課題への協働での取り組み
- ホンジュラスのプロメタムをはじめ、日本と現地政府（教育省等）とからなるチームにより、課題解決に向けた、新たな(innovative)なアプローチとして、教科書編纂、教員用指導の手引書などの編纂が行われた。(グアテマラの場合はGuatemala) ➡ 政府レベルのCD
- 学校現場での新たな教科書と教育法の普及には、政府による研修に加え、学校に派遣された、協力隊員の活動が大きく貢献 ➡ 教員レベルのCD

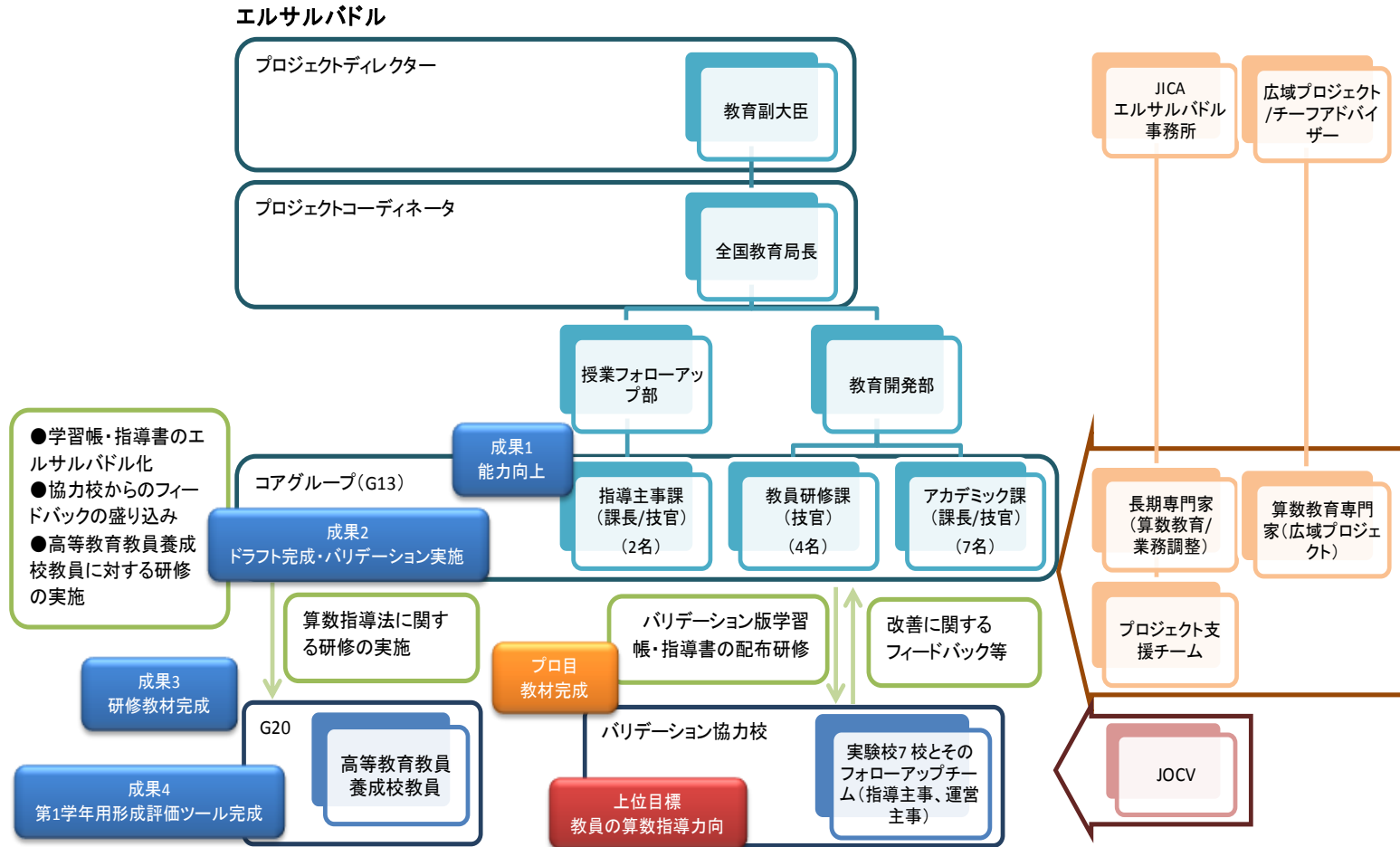
- さらに、生徒には、協力隊員が教員を巻き込みつつ「算数で考える力を育む」ことに尽力  児童生徒のCD
- このような形での、各層のCDに、技プロの専門家とチーム派遣の協力隊が連携して貢献

ホンジュラス共和国算数指導力向上プロジェクトフェーズ2実施体制

(プロジェクトにおける青年海外協力隊の貢献)



エルサルバドル共和国算数指導力向上プロジェクト実施体制

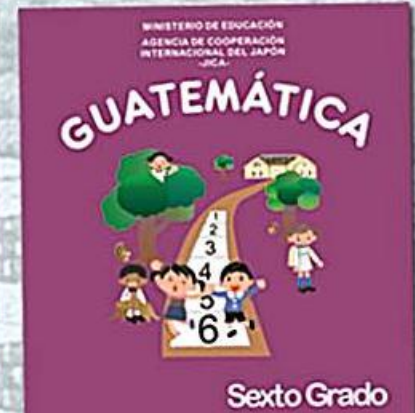
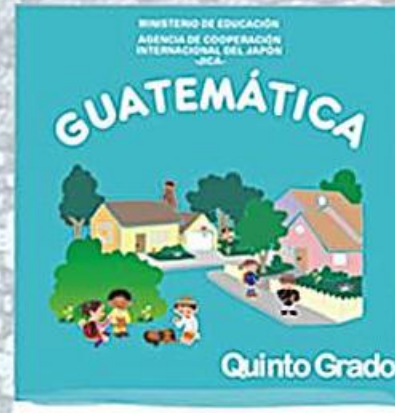
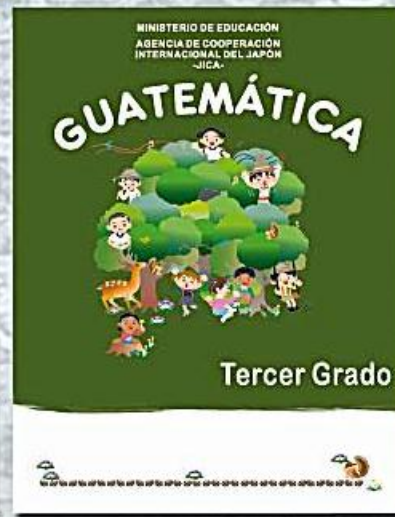
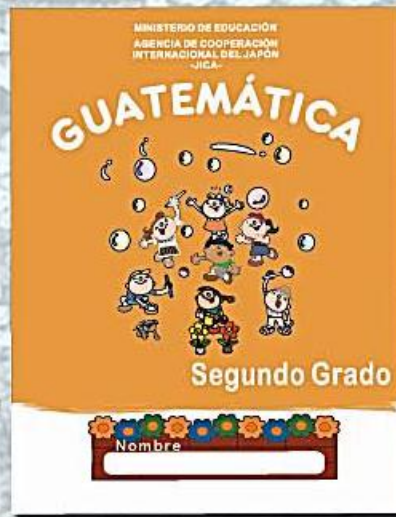
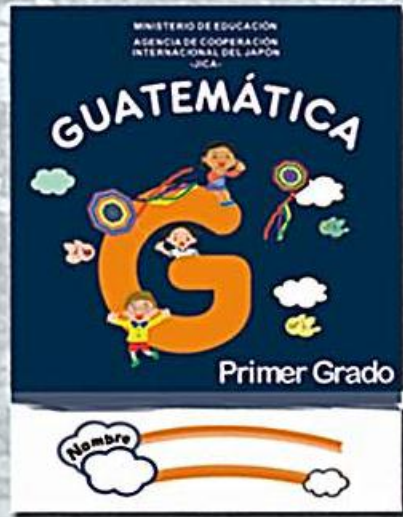


協力隊員、教員と児童

- 日本の協力で作成された算数の教科書Guatematicaは、2008年に国定教科書になっていたが、グアテマラ西部の小学校では、赴任当初ほとんど使われていなかった。
- 研修会を重ねるにつれて、分かりやすく指導できるGuatematicaの価値が見直され、全員の先生が使うようになった。
- さらに、子供たちの反応も変わった。自分で考えて問題を解く楽しさを知り、発言も増えてきた。
- (Mundi 2015年1月号より)

グアテマラで日本の協力で作成された算数教科書

(出典:河澄さつき氏)



ホンジュラスで日本の協力により作成された算数教科書
(出典: 西方憲広氏)



教員への普及(例)

- 教員対象の研修会で、手作りの教材を使いながら小数点についてわかりやすく解説
- 授業が終わった教室で、教員が集まり、授業を視察して気づいた点を話し合い表にまとめる

中米・ドミニカ共和国 広域協力プロジェクトへの発展

- 協力隊との連携は継続
- 各国の実情に合った取組が行われ、各国でも教科書の編纂
- 広域での経験の共有（広域研修）
- ホンジュラスでは、教材開発の重要性を認識した教育省が、スペイン語や理科の教材を自ら作成（CDのさらなる進展）
- エルサルバドルでは、教育大臣に就任したカルロス・カンフラ氏（数学者）は、JICAの協力を高く評価し、高校までの一貫した算数・数学教育を目指す新たなフェーズの協力が開始されることとなった（CDのさらなる進展、スケールアップ）

年度 (日本)	LLECE 学力試験	広域研修/ワークショップ	ホンジュラス	ドミニカ共和国	エルサルバドル	グアテマラ	ニカラグア
1980'							
1990'	第1回1996年実施		小学校教諭協力隊員派遣 協力隊グループ 活動展開				
2000					1992年 小学校教諭 和平合意 協力隊員派遣	1996年 小学校教諭 和平合意 協力隊員派遣	
2001							
2002		第1回広域W/S(3月)	1事前(1月)				
2003		第2回広域W/S(11月) CECCへのJICA専門家の出席(11月)					
2004			1中間(8月) 算数指導力向上プロジェクト 2003.4-2006.3	事前(12月)	個別専門家 協力隊 J/V/SV	ベルシェ政権 協力隊チーム派遣 (初等教育算数科学力プロジェクト) 2003.10-2006.03	
2005		(ホンジュラス派遣専門家の出張により対応) 日・中米サミット(8月) アドバンス本邦研修(10・11月)	2事前(6月)				
2006	第2回実施	第1回広域研修(4・5月) 第1回本邦研修(6・7月)	1終了(9月) 2事前(1月)				
2007		第2回広域研修(4・5月) 第2回本邦研修(11・12月)	個別専門家(基礎教育強化)2005.10-2007.9				
2008	第2回報告書発表 2006.04-2011.03	「算数大好き！」広域プロジェクト 第3回広域研修(4・5月) 第1回ボリビア研修(10月) 第3回本邦研修(11・12月) 第1回ホンジュラス研修(12月) 第4回広域研修(4・5月)	2中間(1月) 算数指導力向上プロジェクトフェーズ2 2006.4-2011.3	中間(2月) 算数指導力向上プロジェクト 2005.05-2010.05 GN:	個別専門家(基礎教育強化)2007.10-2009.9		
2009		第2回ボリビア研修(10月) 基礎教育第1サイクル算数指導・学習改善セミナー於ドミニカ共(3月) 第5回広域研修(4月) 第24回アンティグワ算数数学教育学会大会於グアテマラ(10月) 国際セミナー於ニカラグア(1月) 国際シンポジウム於ホンジュラス(2月)	ミチエレティ政権(自由党)				
2010			2終了(9月)	終了時(2月)			
2011							
2012		国際セミナー兼広域W/S於グアテマラ(9月)					
2013	第3回実施予定						
2014			基礎教育強化 2011.11-2012.12				
2015							

備考
 (比較的)左寄り政権
 (比較的)右寄り政権
 中道もしくは未宣言

2016年8月任期満了予定

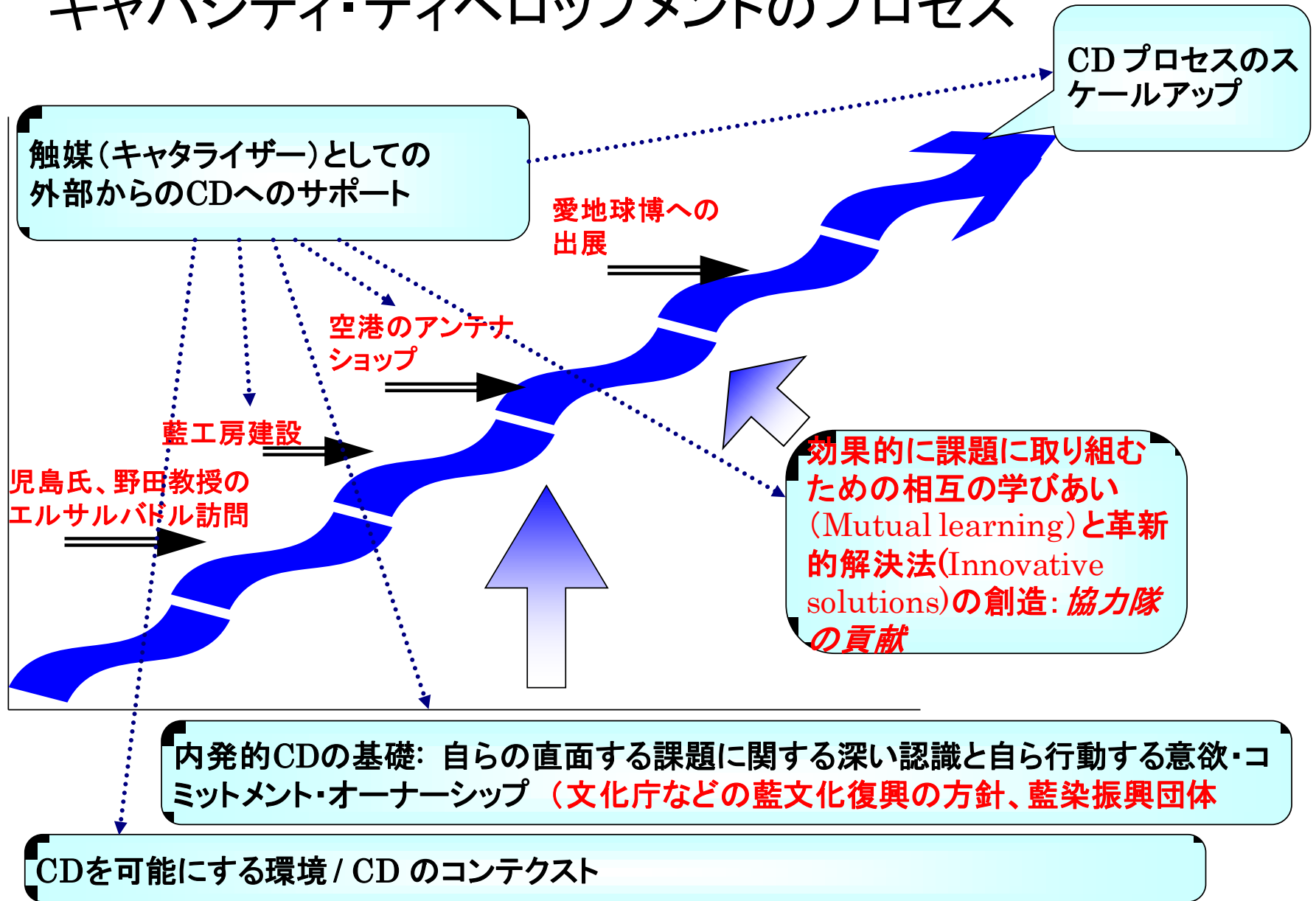
2017年1月任期満了予定
1987年和平合意

河隅さつき(2013):「算数大好き！」広域プロジェクト(Proyecto Regional “¡Me Gusta Matemática!” en Centroamérica y El Caribe) 関連各国現況とりまとめ資料

3. マヤ・ブルーの復興へ

- 背景
- 藍は人類が最も古くから利用した染料の一つであり、中米でも、マヤ時代に使われていた。しかし、安価な化学染料に駆逐される形で、日本でも中米でも藍の文化は、廃れていった。ただ、日本では、藍文化の伝統は四国などの地域で受け継がれて今日に至っているのに対し、**中米では、最後に残ったエルサルバドルでも、1974年に最後の藍工房が閉鎖された。**こうした状況に対し、コロンブスのアメリカ到達500周年の**1992年に開催されたパナマでの民族学会で藍文化復興の決議が行われ、翌年には、エルサルバドル西部の都市、サンタアナの工房で藍染が再開された。**同国文化庁にいたロレンソ・アマヤ氏などの尽力によるところが大きい。そして、グアテマラに在住していた児島英雄氏が1995年に同氏を訪問、エルサルバドルと日本の藍文化の交流のきっかけとなった。

キャパシティ・ディベロップメントのプロセス



藍工房での藍染技術の現地適応と普及

- 藍工房は、チャルチュアパ市のカサブランカ遺跡公園と、サンタテクラ市の米州農業協力機構（IICA）の2か所につくられたが、いずれにも、協力隊員が派遣され、エルサルバドルにおける、藍染の研究、普及に大きく貢献した。実際、協力隊員の長期にわたる日々の活動なくしては、これまでの、この国における藍染の技法の普及はあり得なかったと言っても過言ではないであろう。藍産業復興については、草の根技術協力を除いて、JICAが正式に技術協力プロジェクトとして行ったことはなく、従って、専門家の派遣も行われなかった。様々な協力を、大使館、JICA、JETROが行ったが、**藍文化と藍産業復興への協力において、最も重要な、いわば現場でのCDの部分を担ったのは、協力隊員であった。**

藍に関する認識の変化

- 米州農業協力機構（IICA）は、国際機関であり、その重要性は広く知られているが、そのエルサルバドル支所の一般職員には、当初は、藍染の重要性が十分知られていたとは言えない。IICA内に設置された藍工房で染色をはじめると、臭いを嫌って、戸を閉める職員や、いやな顔をする職員も当初はいた。IICAに派遣された協力隊員は、道具を磨き、掃除をし、授業と作品製作に没頭することで、意識を変えていった。その結果、IICAに来賓が来ると、所長から必ずと言っていいほど藍の説明や、工房の案内を求められるようになり、帰国が近づくと、任期の延長まで求められるにいたった。

相互の学習、協働での新たな取り組み

- 藍工房での、藍染の授業では、教えることから新たな発見があり、逆に生徒から教わる事もあった。また、藍農家を訪問し作業を手伝い、種まきから育成、そして抽出までを経験できたことは、一藍染作家としての本望であった。日本の伝統にこだわらず、世界視野で藍の世界を見れるようになったのは、青年海外協力隊に入隊できたからこそだと思う。
- エルサルバドルで知られていない藍染の新技法の導入、国内外における市場開拓、藍と藍染製品の品質の向上、特に海外と比較しても品質が劣らない商品開発をするように、海外での販売可能性のあるブランド形成をめざした品質指導など、活動は多岐にわたるものであった。
- 特に、エルサルバドルで確立していない「型染めの技法」の開発に力を入れ、その技術を確立し、解説書を作成した。また、商品開発では、草木染めと藍のあわせ商品を見本として制作している

藍工房における藍染め普及の効果

- IICAの藍工房のあるサンタテクラ市は同市の一村一品運動の地元産の代表的民芸品として、藍染め製品を推進している。同市におかれた、IICAの藍工房を拠点とした協力隊の長期にわたる活動の寄与を無視することはできない。
- カサブランカ遺跡公園内にも設けられ、協力隊員が派遣されていたが、同公園内にあることから、遺跡とあわせ、藍工房を訪問する人々が多く、公立学校の学生だけでも、訪問者数は、年間3000人に達するとされる。また、藍工房で藍染を学んだ人の数は、藍工房開設の2002年以来、1800人に上る。

4. 協力隊と文化財(遺跡)の保存、観光の振興

- **チャルチュアパ遺跡群**
- マヤ文化の都市遺跡として最も重要なものの一つが、チャルチュアパ遺跡群である。
- チャルチュアパ市にあるこの遺跡群に関しては、1960年代、ペンシルバニア大学のロバート・シャーラー調査団によって大規模な学術調査が行われたが、発掘後の建物の修復・保存を伴うものではなかった。
- 1992年の内戦の終了、和平協定締結のわずか3年後には、大井邦明教授を団長とする京都外国語大学調査団が同遺跡群の中のカサブランカ遺跡地区の考古学調査を開始した。



2002年に草の根文化無償資金協力によって
建設されたカサ・ブランカ遺跡公園の様子(植
村まどか、2012年撮影)

- 文化庁、名古屋大学、JICAにより、「チャルチュアパ市の地域観光開発を目的とした先スペイン期国立遺跡公園の整備プラン」が策定された(市川、2014)。その実施に向けて、JICAに対して考古学、保存科学、造園分野の協力隊員の派遣が要請された。こうして、2003年以降、順次協力隊員が赴任するに至る

- 協力隊の活動内容から見て、この2003年からの5年間は、考古学調査や、遺跡など文化財の保存修復活動を通じての、技術移転、人材育成が主たる活動であった時期であった
- カサブランカ遺跡公園の詳細なデジタルマップを作成し、また、タスマル地区等において、文化庁考古課職員、名古屋大学調査団員とともに、調査を行うとともに、これを通じて、現地の考古学専攻生や作業員らへの発掘調査にかかわる技術移転を行った。この時期、協力隊員は多くの活動をおこなったが、なかでも、鈴木隊員が博物館の外に、考古学発掘で作られた施設の一部を、屋外展示施設として活用する設計案(4N試掘抗の覆屋と見学路、遺跡公園正門他)を作成し、それが、草の根文化無償資金協力によって、建設され、遺跡公園の整備・充実に貢献したことは特筆に値する



タシュマル遺跡(市川彰氏撮影)



2007年に草の根文化無償資金協力によって
建設されたカサ・フランカ遺跡公園屋外展示
施設(市川彰氏、2007年撮影)

協力隊員の貢献(事例)

- 市川隊員は、ラ・クチージョ地区の緊急発掘調査、**カサブランカ地区5号建造物**前の排水路整備や、タスマル地区などの発掘調査を行い、これらを通じ、エルサルバドルで初めての先スペイン期の埋葬地、原位置を保った石碑祭壇複合を発見するなど、いずれも、同国考古学史上重要な学術的発見に貢献した
- 古代マヤ文化圏の中部や南部で特徴的な、建造物の正面に石碑(あるいは石柱)と祭壇石を祭るという慣習が、カサブランカ遺跡の5号C建造物(紀元1-4世紀)においても確認された意義は大きい

- 排水路整備にともなうチャルチュアパ遺跡カサ・ブランカ地区5号建造物前調査(2006年)は、古代マヤ文明の特徴的な文化要素のひとつである「石碑祭壇複合」の原位置での発見につながった。石碑も祭壇石も素面であるがゆえに、一見すると何の価値もないようにみえるが、世界的に有名なティカルやコパンといった諸都市が栄えた「古典期(紀元後3~10世紀)」と呼ばれる時期よりも古い時期に相当することが重要である。チャルチュアパはこれまでもマヤ文明の起源や盛衰を理解するうえで学史上重要な遺跡と位置づけられてきたが、石碑祭壇石複合の発見はその重要性をより決定的なものにしたといえる。(市川彰「エルサルバドル考古学における青年海外協力隊活動の学術的貢献」より。)



図3 カサ・ブランカ遺跡公園内5号建造物
(市川氏撮影)

成果を社会に還元することを目指す 協力隊員の活動

- 村野正景隊員は、パブリック考古学的視点から、遺跡をはじめとする文化財の観光や学校教育への活用に関する調査を実施し、中米7か国の文化財や観光開発に関する広域研修を実施したほか、考古学調査と住民との会話をヒントに古代技術の復元と民芸品開発プロジェクトを立ち上げ、現地住民や陶芸家を巻き込む活動を実施した。
- 池田瑞穂隊員は、考古学遺産を資源として活用できる人材の育成をめざし、その結果、考古学活動の一端を現在に生きる地域コミュニティの中に位置づけ、博物館は地域の歴史に興味のある住民の相互コミュニケーションの場であるとして提示した。続く久松恵輔隊員も一般市民の身近なところに文化財が存在することを周知させ、従来、主に考古学専攻生や考古学の専門家を対象に技術や知識の移転が行われてきたが、協力隊の、近年の活動を通じて、協力隊員の達成した成果が、さらに一般市民へも還元されるに至った。



図4 考古学を通じた教育活動の様子
(池田氏撮影)

協力隊によるCDへの貢献

- 考古学分野の政府、研究者、遺跡の保存に携わる人々のCD: 文化庁文化遺産局考古課に所属するエルサルバドルの考古学者8名のうち6名が学部生時代に隊員との何らかの共同作業を行い、そこで技術指導を受けている。残る2名についても、隊員のカウンターパートとして活動を共有し、成果を挙げている(市川 2014)。この国の考古学への貢献という意味でも、8名のCDは重要であったと考えられる。また、彼らのCDが、相互の学びあい、共同作業によって進められたことも、特筆に値する。市川隊員は、発掘調査実習生として受け入れた学生や、現地作業員である「彼ら/彼女らとともに共同作業をおこない、調査報告書や論文をスペイン語で執筆してきた。論文構成や調査アイディアの基本は筆者(注:市川隊員)が提案してはいるが、同時にスペイン語などの校正作業などを通じて学生らに考古学研究者として成果還元や論文作成がいかに重要かを認識させることに成功したものと思われる」と総括している

- チャルチュアパ市にある由緒ある教会の保存などの活動を遺跡公園開所以前から行っていた、「サンティアゴ・アポストル教会修復・保存委員会」が地元で中心的な役割を果たしてきたが、この組織のメンバーや職員であった、遺跡ガイドは、現在もカサブランカ遺跡公園の職員として活躍している。このNGOとそれに所属する人々は、「協力隊員との共同活動を通じて遺跡への理解を深めるとともに、子供や一般向けのワークショップを開くなどして文化財保護や活用に関する啓蒙活動に関する手法を学んだ」

- 市川隊員は、考古学分野での、エルサルバドルにおける協力隊の貢献を次のようにまとめている。「協力隊活動の最大の功績は、調査研究から遺跡の修復保存、そして社会還元に至るまでの一連の過程を通じて現地の様々な位相の人材育成に寄与したことであると筆者は考える。これは日本の考古学が国際社会に貢献するための一つのモデルケースとして提示することが出来るだろうと思っている

5. 結語

- 算数プロジェクトにおいては、プロジェクト実施の拠点としてのプロメタムの建物の無償資金協力による建設と教員訓練施設としてのプロメタムの制度的確立は、**CD推進の重要なドライバー**であった。そして技プロによって編纂、制作された教科書、練習帳と指導要領の全国配布もそれに続き、重要なドライバーとなった。これらは、全国規模での教育の質の向上に向けたCDを大きく推進する役割を果たし、また、これらが、現場レベルの個人・組織（個々の教員、その所属する学校など）の**CDを容易にするコンテキスト**となった。

- しかし、これだけでは、現場レベルでのCDプロセスは、十分に進まなかったであろう。それを可能にしたのは、チーム派遣による協力隊員であった。すなわち、図の中で、課題の認識、課題に取り組んでいく意欲、コミットメントがCDの基礎と位置付けられているが、プロメタムにおける教員研修とならんで、派遣された協力隊との交流が教員の認識を高め、動機を強めるうえで、重要であったと考えられる。かつ、現場レベルで、協力隊員と教員との相互の学びあいや、手を携えて課題に取り組み、新たな解決方法を見出していく活動を行ったことも、CDプロセスにおいて重要であった。

- エルサルバドルの考古学関係者、その組織、エルサルバドル全体での考古学の発展と、遺跡などの文化財を中心とした観光産業の発展にかかわるCDにおいても、協力隊員の貢献は顕著であった。**タスマル地区を除けば、ほとんど知られていなかったチャルチュアパ遺跡群の発掘・保存から、それを中心とした文化財保存にいたるまでを一貫して行ってきた、日本とエルサルバドルの様々な人と組織、とりわけ、エルサルバドル文化庁、日本の大学、協力隊員などの貢献は大きい。そのCDのプロセスの中で、京都外国語大学や、名古屋大学による調査団の活動、草の根無償などによる、博物館の設置と、屋外諸施設の整備（試掘坑と覆屋、見学路など）など、CDのドライバーが次々と、推進力を発揮したことは明らかである。**

- しかし、これらに、協力隊員の先に述べたような、日々の活動、とくに、学びあい、課題解決の共同での取り組みがなければ、真に内発的なCDプロセスは進まなかったであろうと考えられる。遺跡の調査と保存・修復、それらについての、住民の理解の向上、住民を巻き込んだ、文化財を活用しての観光の振興は、日本からの調査団の調査や施設の充実を前提としながらも、協力隊員と考古学専攻学生や作業員らとの協働、地元の人々やNGOとの協働によってはじめて可能であった。

- こうした協力隊の役割は、CDという文脈では必ずしもないが、協力隊に関する法律の中でも示唆されていた点であった。旧国際協力事業団法は、第1条(目的)を受ける形で、**第21条**において、協力隊に係る業務として「**開発途上地域の住民と一体となって当該地域の経済および社会の発展に寄与することを目的とする海外での青年の活動を促進し、助長するため次の業務を行うこと**」と規定していた。住民と一体となって経済社会発展に寄与する活動の中に、内発的CDに貢献する活動は、その最も重要な部分の一つとして含まれると考えられよう。2008年の独立行政法人国際協力機構の発足に際して、**国際協力機構法が定められたが、この法律でも、第15条等に、この考え方が継承されている。**